

2014年5月入職

しがちひろ
志賀千紘

アンテナを研ぎ澄まして、小さな情報も見逃さない

指導ではなく、同じ目線で歩む

食べることは人間にとっての大きな喜びです。私が栄養士になったのも、「食べることが好き」という理由が大きく影響しています。しかし、透析治療を受けている患者さまは、何でも自由に好きなだけ食べていいわけではありません。栄養指導に伺うとやはり多くの患者さまは「何を制限されるのだろうか」と身構えています。そこで心がけているのが、ワンクッションを入れることです。最初から食事の話をするのではなく、まずは警戒心や不安を払拭してから本題に入っています。ネガティブな言葉も極力使っていません。例えば、制限という言葉もコントロールに置き換えています。

実際の食事に関しても、できる限り好きなものを食べられるように配慮しています。食べられない理由は、精神的な理由や咀嚼嚥下機能の低下など様々で、そういった小さな情報からヒントを探っています。症状が良くなるのを待ってもらったり、そのまま食べられないなら調理法をアレンジしたり。指導というよりも、同じ目線で歩んでゆくというスタンスに近いかもしれません。相手の立場になって想像力を働かせ、その上で気持ちを理解する。私は「感性＝問題意識」だと捉えていて、感性が鋭いということは、相手が何を求めているのかをキャッチアップする力があることだと思っています。小さな情報も見逃さないように、もっともっとアンテナを研ぎ澄ましていくことが、これからの目標です。

死生観と仕事観が変わった出来事



これまでのキャリアの中で、死生観と仕事観が変わった出来事があります。いつも優しくお話ししてくださる患者さまがいらっしゃったのですが、あるとき、その方の口からふと不安がこぼれ落ちました。だんだん弱っていく体、死が近付いていることへの怖さ。その後、「誰にも打ち明けることができなかった。神様があなたを選んでくれたのね。話せてスッキリした」と言われたときは涙が止まりませんでした。どう

いう言葉をかけていいのかも分からず、ただただ自分の無力さを痛感しました。死の恐怖の前では、自分が果たせる役割はあまりにも小さいのだと。でも今はその出来事は患者さまと向き合う姿勢を変えてくれたきっかけだったと感じています。食事を通して少しでも生きる喜びを感じてもらいたいと思いながら仕事に取り組んでいます。自己研鑽を続け、栄養士としての道をさらに探求しようと決意できた意味でも、忘れられない出来事です。



今ある環境に感謝の気持ちを忘れず、
患者さまが求めていることを探究し続ける。

志賀 千紘

